

児童思春期の心理臨床を学ぶ症例検討会

医療法人水明会佐潟荘 医局

平成 30 年 4 月 15 日、中越小児こころの臨床研究会と佐潟荘思春期青年期部門共催で、新潟子どもの心臨床勉強会が開催され、小児科医、精神科医、心理士、精神保健福祉士、看護師等、42 名の参加が得られました。佐潟荘からも 12 名の参加がありました。関東精神療法セミナーの小倉清先生、川畑友二先生をスーパーバイザーとしてお招きし、精神医療センターの吉永清宏先生の 10 歳少年のケース検討を 14 時から 17 時まで 3 時間行いました。会の冒頭に青山雅子先生から「はじめの言葉」をいただきました。かねてから青山先生は小倉先生と臨床感覚が同じであると感じています。検討会ではスーパーバイザーお二人の息の合った掛け合い、発表者の真摯な姿勢が際立ち、休憩なしの 3 時間があっという間に感じられる、珠玉の時間となりました。小倉先生の「3 歳までの歴史を良く聴き取らなければ、治療にならない。何らかの事情で聴き取れないときにはどんな風にお世話され、どんな思いを抱えて生きてきたのだろう、と想像することが大切なんだよ」「発達障害と診断して、何でもそれで説明して終わりというのはおかしいね」という言葉。川畑先生の「問題行動というけれど、なぜそうしたんだろうね」「症状でも行動でも何ひとつ意味のないことはない。それを見ていかずに行動を正そうとしたり、薬で抑えようとしてもそれは治療ではない」という言葉。お聞きしていて、日々の臨床で、ただ表面をなでるだけになって

いなかったか、と反省しきりでした。最後に長岡日赤病院の田中篤先生が「終わりの言葉」を述べられました。今回、関東精神療法セミナーに参加しているご縁で佐藤小児科医院の佐藤昌子先生と共に世話人をさせていただきましたが、またこのような機会を作れるよう、日々精進していきたいと思います。